

# 広島俳句倶楽部

令和四年八月作品集

リハビリテーションと俳句 綾乃

私は、リハビリテーションの仕事をしています。

リハビリテーションは、怪我や病気からの「回復訓練」というイメージが強いですが、語源的には、「リ」は「再び」、「ハビリス」とは「人間にふさわしい適した」という意味があります。心・体・社会的な弱さや、衰え、悲しみが起きても、「人は再び、ふさわしい人になる」ことを患者さんが見せてくれ、私はそれを日々学んでいます。

俳句は、季節の力や美しさ、普遍性をもって、私に様々なことを教えてくれます。

リハビリテーションに励む人からの学びと俳句からの学びは、どこかで繋がっているように思います。

す

車椅子緑の道に譲り合ふ

酸葉かな持病とともに生くる人

花万朶けふの一步のより遠く

実桜のけふの色はと患者問ふ

薬降る車寿の人の脈に触れ

リハビリを座して待つ人夏の朝

白南風や病室の窓つと開き

夏菊を臥す人に向け生けにけり

肺の音聴く静けさや日の盛

病葉も風に揺れたる櫓かな

《作品鑑賞》

ちどり

七年前、私の母は脳梗塞になり、手術の後リハビリを受けました。毎日細やかに、やさしく、そして粘り強くリハビリをしてもらった。おかげで、九十五歳の母は、みなさんに支えてもらいながら、今でも自分で田舎で暮らしている。

車椅子緑の道に譲り合ふ

新緑の中、車椅子の人同士が笑顔で道を譲り合っている。とてもすがすがしい。

白南風や病室の窓つと開き

梅雨が明け、病室の窓をきつと開けると、南風が一気に入ってくる。部屋の空気が一変して、元気が出て来る。

病葉も風に揺れたる櫓かな

病葉も共に風に揺れている櫓から、病氣の人もそうでない人もみんな共に生きていこうと思う。

四国の国道を走る 大畑 恵

夫婦で五年をかけて、車で四国のすべての国道を走りました。高知が私の故郷であり、また、夫が学生時代を過ごした地でもあります。き、かけは、夫がエーチューブで国道四三九号線を進んでいる人の投稿を見たことでした。最初は、徳島駅前から四万十市までの国道を走りました。対向車が来るとすれ違うのに苦勞するような道で、ガードレールの無いところもあり、怖い思いをしました。が、車窓から見る景色は最高で、楽しくもありました。それから、山の景色と知らない道を走る面白さに惹かれ、二日ほどの休みを取っては国道を走り、いつのまにか五年が経っていました。石鎚山、剣山、三嶺の山々に続く国道も走りました。高知時代に行きたくても行けなかった天狗高原を走れた時は、感慨深いものがありました。

春霞前行く鳩の飛び立ちぬ

桜咲く山を白装束の越ゆ

杉木立過ぎたところの春の里

椿咲く岬の向うに水平線

お遍路の辿る岬の落椿

笹原を真つ直ぐに行く夏の山

笹原を過ぎたる先は雲の峰

雲海を車窓に眺め嶺越ゆる

谷川の上に螢の舞ひ上がる

山里の吾の前行く秋菫

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

四国の国道を走る、その雄大な景色が句から伝わってきます。読む人の想像力を掻き立てる作品になりました。子どもころから知っている景色を大人になって見るとき、人の心には詩が生まれるのでしょうか。

桜咲く山を白装束の越ゆ

お遍路さんの後ろ姿が見えます。お遍路さんは、ところどころ山桜の咲く道を辿り、次の寺へと山を越えるのです。

杉木立過ぎたところの春の里

少し薄暗い杉林を抜けたところに、桜や菜の花、土佐水木もでしょうが、色とりどりの花の咲く山里があったのです。

笹原を真つ直ぐに行く夏の山

一面の笹原の中、滴るような夏の山に車を走らせます。季節「夏の山」がこの句の景色を大きくしています。

山里の吾の前行く秋菫

自分を先導するかのように赤とんぼが飛びます。赤とんぼらしい動きの見える句で、この特別作品に余韻が生まれました。

夏の日のじつと懸かれる吉備の朝

鮎川に沿うて近づく人の声

遠雷の備中を行く人の影

梅雨深く備前に辿る大路かな

鬼ノ城へ向いて歩ける白日傘

名を知らぬ木の実に上る夏の月

さちかうや小高きところ一寺あり

おしろいに遠く鬼ノ城からの風

すいっちよや大路に和氣の山迫り

播磨から吹きくる風が涼しくて

佐保光俊

百日紅今年も咲ける通りかな

街路樹に吹き続けたる南風かな

夕立の気配のしたる大柳

蝉の声止めば雨音し始むる

雨止んで鳴き始めたり法師蝉

蟬の声母の部屋からよく聞こえ

母の居る部屋にて食ぶる水羊羹

塀の罅直して夏の日差かな

まくなぎの参道をゆくふたりかな

青藤巻いて夜景を見てゐたり

村上正人

余呉しづか青景の山に囲まれて

せせらぎの中に咲きたるカラーかな

藻の花を揺らして川の早きかな

夏山の迫るみづうみ波寄せて

泳ぎ子に松原からの風が吹く

泳ぎ子にしづかに波の寄せにけり

白南風は松から吹いて浮御堂

一時を大樹にしのご白雨かな

奥津城に人の影なく花木僅

夜の闇カシナの花に戸惑ひぬ

高尾ひとみ

梅檀の幹に青葉の噴きにけり

梅檀の根元に青葉茂りたる

妹に粥を届けて花魁草

窓越しに妹を見舞ひて晩夏光

遺失物受け取りに行く夏の夕

失せ物の出てきて安堵鰯雲

朝雲の中に皓々秋日出づ

中天に吹き上げられし秋の雲

灰色の雲の中より秋日出づ

雨雲に秋日差し込む薄暮かな

秋沙

ガレージの守宮を道へ掃き出せり

公園に一羽の鳩や日の盛

迷ひつ今日のハンカチ選びたり

白シャツの師と少年の笑顔似て

ひまはりに水やつてをり児童館

ひとつづつグロリオサ見る夏の朝

玄関の白百合開く朝かな

途切れなきチエロの低音夏の夕

蚊遣香健診結果異常なし

三人のソプラノの歌秋はじめ

亜矢

青桐の下で書を読む男かな

少年の素振りは続く枇杷は熟れ

蟬時雨仕事を終へし身に満たす

風鈴の響き渡れる我家かな

潜水艦夏の海より現るる

夏の木の映つてゐたり大理石

茂りたる道を朝夕通ひけり

水郷をめぐれば見ゆる鮎鮎屋

星涼し地下道の猫もう見えぬ

レース着て影の楽しき散歩道

綾乃

検査後の眼科の窓の薄暑光

五月雨の本立の中の静かさよ

ご近所へ一つ剪りたる額の花

蝉鳴くや掃除に集ふ朝の園

万緑の山ゆく人の急がざる

それぞれが酒を持ち寄り暑氣払ひ

神社へと犬も連れ立ち夏の夕

車へと犬と逃げ込む白雨かな

手水舎の霏してゐる白雨かな

夕焼の大温室の光りたる

井藤希

緑蔭に流行りの新書持ち込みて

自転車にスケートボードと補虫網

夏草の高きに隠れ瀬戸の島

長雨にプールの水の濁りたり

夏の月眠れぬ夜を過ぎしをり

涼風に足腰伸ばすテレワーク

校庭に雑草生ひて秋初め

雨止みて何かにつけて秋初め

子の去りて一人聞きゐる秋の蝉

いつの間に車庫の燕の帰りたる

栄吉

庭の隅母の植ゑたる化儼草咲く

青鷺のゆつたりと飛ぶ葦の原

雲の峰映して瀬戸の平らなり

風鈴を宿の窓辺に聞いてをり

母縫ひし姉妹揃ひの浴衣かな

短夜を鳴きながら行く鳥のあり

友の忌の遠くに鳴ける不如帰

朝顔が窓いつばいに覆ひけり

道沿ひの常山木の花を見て通る

古寺は田圃の向う秋遍路

大畑恵

廩屋を青々と葛覆ひをり

朝曇子が掃いてゐる家の前

百日紅こぼるるままに活けにけり

合掌の甲にとまりぬ八月蚊

朝まだき畑に展墓の花を剪る

稲妻や腕に赤子の寢息立て

ひとしきり稲穂に吹いて峡の風

さみどりにさちさち散れり畦行けば

磨きたる上り框に茄子の馬

秋めける石見に寄せて日本海

暁子

青竹の串を洗へり鮎を食べ

風呂場から遊ぶ子の声月涼し

下山する吾に差したる大西日

夕立の黒雲今はすぐ上に

トタン屋根大さ音して白雨来る

服畳みつ遊ぶ夏を惜しみをり

蛸の声に山家の戸を開く

手の届くところに鳴いてつくつくし

稲の花香り馴染みの道通る

登校子と挨拶交はす秋の朝

すみれ

涼新た湖畔の草の濡れるたり

見上ぐればすぐそこに居る秋の蟬

みどりごの瞳にひとつ秋の雲

風に乗りまた浮き上がり秋の蝶

昔居し家にシーソー花カンナ

花桶を通りに並べ盆の市

風吹いて一度に止まる虫の声

対岸に漁網干しあり秋の風

高みより鳥の声する初紅葉

眠る子に上着をかけて村芝居

知佳子

子と二人羅を着て出掛けけり

幼子が缺て茄子を剪り取りぬ

ガラス戸の外側を這ふ守宮かな

みんなの次から次に鳴きにけり

小流れの水を汲んでは墓洗ふ

小流れに腰まで浸かり水遊び

小流れに笹舟流す夏帽子

稗拔きし所にまたも出てゐたり

小かまきり稲の景先に跳んで来る

母寝ねて厨にちちろ鳴きにけり

ちどり

ジグザグに花から花へ蜂の飛ぶ

熟したる楊桃の実を手を受くる

三日目と数へて梅を広げ干す

汗拭いて振り返り見る向う峰

簪座に立ちて眺むる夏の瀬戸

白雨来てずぶ濡れとなる帰り道

昼の庭ゆらりゆらりと夏の蝶

凌霄花を朝に夕べに掃いてをり

庭に立ち袖下抜くる秋の風

語らへる縁側に吹き秋の風

雲雀

車とフェリー―海月の海を行く

夏の海ほとり緑の島が浮く

盆の月迷子にならず帰宅せり

流星やポケットに小さき何か

花火して隣家も犬も遠くなり

今回は一人少なき花火かな

はね返る地面激しき花火かな

大人の沈黙少年の花火

水色に金文字若き缶ビール

遊船の歌い始める老いの不意

ふじ女

風鈴のかそけき音に本を用づ

さるすべり咲くたび父のこと思ふ

帰省子にまづは大きな塩むすび

少年が従兄弟に会えた夏休み

帰省子の角曲がるまで見送りぬ

帰省子の県境越ゆるあたりかな

妹はいつも真ん中蚊帳の夜

熱帯夜眠れぬ窓に赤き星

凌霄花のことごとく地に落ちにけり

ひまはりの道を抜けたる先は海

松田裕子

近寄りし淵の山女魚の影の消ゆ

禪寺の背戸に聞こゆる小滝かな

我が足を海へと向けて昼寝せり

夜釣の灯はるかな岬に点滅す

涼風や吾子の寝顔を隣に見

朝蟬の声の厚さに目覚めたる

少年と少女隔つるソーダ水

景鶏頭あの日廊下に立たされき

吊し柿山里の日の早く落ち

いつかまたこの地に立たむ流れ星

森口良樹

川風やビールの泡の盛り上がり

茉莉花の香るや夜の雲流れ

赤き薔薇モテイリアーニの墓に置く

夾竹桃われ戦中の生まれなり

遠山に雨降るらしき凌霄花

足裏の砂の流るる土用波

夕暮の沖遠くなり蚊喰鳥

月の夜の枝に水着の干されあり

蛸や音戸の瀬戸を下に見て

辻純江

いつの間に吾の丈を越え草茂る  
雨溜めて重たげに揺れ百日紅  
噴水のしづきに雀散りにけり

夏燕正門閉づる校庭に

山肌に雲影一つ早空

影を出てまた影に入り日の盛

妹と揃ひ手縫のアッパッパ

それぞれの子に一つづつ梅酒の実

令歎の花母の介護を決めにけり

山野ウタ

おはぐろの昨日と同じ岸に居り

蜥蜴の子つと止まりけり石の上

川音に近く咲きけり野萱草

先生と生徒日焼を比べをり

かなかなや沢釣の人見てをれば

かなかなに包まれてゐる流れかな

川音の絶え間なくして稲の花

蘆刈の音続きをり暮れかかる

桑門わかこ

秒針と河鹿の声と聞こえる

かはほりや遊び疲れし子の重さ

シャワー浴ぶしやばんの行方眺めつつ

雨止みて夕蟬の声空に満つ

やぶ蚊飛び見えぬ姿を目で追ひぬ

掌をかざす女や日の盛

我が影のやや長くなる晩夏かな

吾に似る羅漢を探す秋隣

村上理江

百日紅父の姿の鮮明に

久々のワンピース着て夏の夜

端居して病の経過聞いてをり

ひぐらしの声を近くに聞きにけり

庫裏の戸を開け放ちたる秋の風

秋明菊一輪を挿すガラス花器

紀英子

片蔭の健康談議に加はりぬ

ずりずりと畦這ふ蛇や夏深し

島の影飽かず見てゐる晩夏かな

どの木にも青き実の付く土用かな

菜園に支柱の残り夏の果

盆の月宴を抜けて縁に佇ち

熊谷ゆり子

大蛸を掴みて友の夏見舞

日の盛履歴書何度も書き直し

蜘蛛の子のビヨンと現れビヨンと消え

周波数合はせてゐたる夏の夜

それぞれに沙羅の花びら風に揺れ

古希過ぎて出会ひし友や雲の峰

高梨英子

坂道に涼風到る千光寺

帰省子の親の背を越え立ちてをり

米を研ぐ手を止め眺む処暑の雲

萩の花ひとつふたつと咲き結む

ひぐらしのカナカナカナに耳澄ます

初露に下駄を鳴らして帰りをり

美耶

泳ぎ子のサンダルを脱ぎ駆けてゆく

姉の死の葬列行くや夏の昼

困りごと残したままに夏果つる

灯籠のゆつくり流れ被爆川

逝きし姉思うて見るや盆の月

友岡崇山子

爆心に近づくほどに蝉時雨

フェンス越え朝顔の蔓定まらず

蛸やバス停まではまだ遠く

盆の月母屋の宴続きをり

西の空色の消えゆく盆の月

撫子

砂の上みみず一匹横たはる

朝刊に手を伸ばしたる晩夏かな

立秋の川沿ひ歩く風の中

冷やしたる白桃いつきに食べにけり

久々に語り尽すや盆の月

やす保

ピオーネの届き電話で礼を言ふ

桃の実を冷やし頬張る風呂上り

夜の九時薄雲かかる盆の月

スタジアム球の行方や盆の月

上島康子

炎昼の門司港鉄の匂ひけり

地に還る空蟬百を越えにけり

自転車の補助輪とれて夏終る

ゆつくりと西に進むや盆の月

高嶋絹代

白シャツの埋め尽したる甲子園

鳴く蟬の声音も変り静かなり

渡る風こちよきかな夏の果

山の端の明く浮きたる盆の月

民

ビヴァルデイの四季聴く夕べ盆の月

幼子の眼見開く盆の月

深夜便聞きつつ眺む盆の月

遠藤さつき

朝顔の紫冴ゆる雨あがり

盆前に今年も咲くや百日紅

窓越しにひとり見詰むる盆の月

金川昭子

乳幼児大汗かいて抱かれをり

火山には早や法師蟬鳴いてをり

盆の月深夜の窓に小さく見ゆ

河原静子

明早し誰彼意しに声をかけ

朝蟬のひとしきり鳴き風の吹く

野に遊び精悍な子の夏果つる

みさ子

炎昼に担々麺のつゆが跳ね

夫婦して西瓜大きく切り分くる

マスカットがタルトの上に載つてをり

山崎桂子

令和四年七月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

|                  |       |
|------------------|-------|
| 梅の実にとつぷり安芸の暮れにけり | 佐保光俊  |
| 近道に零れてゐたる柿青し     | 村上正人  |
| 朝の日のこれから上る立葵     | 高尾ひとみ |
| 万緑の中や古びし橋に立ち     | 亜矢    |
| 薫風や鳶はしきりに湖に出て    | 井藤希   |
| 発車には少し間のありラムネ飲む  | 暁子    |
| 夕立の髪を拭へる女学生      | すみれ   |
| 届けたき人を思ひてトマト揃ぐ   | 雲雀    |
| 夕立の駅あの学生の母らし     | ふじ女   |
| 濃あぢさゐ身重の人に手渡しぬ   | 松田裕子  |

森口良樹 私の選んだ十句

|                 |       |
|-----------------|-------|
| ここからは吉備は山がち雉鳴いて | 佐保光俊  |
| 書込みの多きノートに汗の染み  | 村上正人  |
| 梔子の香れる雨の町をゆく    | 高尾ひとみ |
| 雑魚寝して四方山話明け易し   | 秋沙    |
| 万緑の中や古びし橋に立ち    | 亜矢    |
| 微睡みの深き眠りに青田風    | 栄吉    |
| 空つぼの鳥の巣揺らし南風吹く  | 暁子    |
| 夏の月ほのかに山の端の赤く   | 新庄憲彦  |
| 白雨去る一葉一葉に雫して    | 知佳子   |
| 昼の灯をともして梅雨の厨かな  | 松田裕子  |